

現代語のトと中古語のトテに関する 引用述語の省略という分析について

辻本 桜介

1. 問題の所在

日本語における引用構文の典型的なものは、直観的にも実例の量から見ても、「言う」などの発話動詞、あるいは「思う」などの思考動詞が、「～と」という引用句を必須の補足成分にとるタイプと言って良いだろう(本稿ではこうした発話動詞・思考動詞を引用述語と呼ぶ)。それに対し、(1)(2)のように、引用述語を伴わなくても、引用内容をトやトテといった形式で受けて、発話も思考も表さない述語句にかかっていることがある。

(1) 佐藤は「遅刻しそうだ」と家から飛び出した。

(2) 女これかれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきところに下りて行く。

(土佐・一月十三日・29)

これらを引用構文の一種と見ることに異論は無いと思われるが、「～と」という形が含まれているにも関わらず、それを受ける引用述語が存在していない点は、典型的な引用構文を重視する立場からは非常に奇異で、特殊なものに映るはずである。そうした疑問に対する解決案として、(1)については「～と」の直後に「言って」あるいは「思って」のように、引用述語のテ形が省略されている、という分析方法(省略説(一))がとられ、(2)については、「～とて」の部分が「～と言ひて」あるいは「～と思ひて」を省略したものである、という分析方法(省略説(二))がとられることがあった。しかし、省略説(一)も省略説(二)も、「省略」と呼ばれる現象が何であるかをはっきりさせ、確かにその「省略」が引用述語において起きているということを実証しない限りは成り立たない仮説である。

そこで本稿では、2節で先行研究を概観して何を省略というべきか検討し、単にある成分を挿入できるか否かを問う補充可能論との違いを意識しつつ省略の定義を立てる。そしてその省略の定義から省略説(一)・(二)のいずれにも従えないことを論じる。しかし、それだけでは、本稿で用意した「省略」の定義の方を拡張・修正すべきだという批

判がありうるので、3節・4節では、それぞれ省略説(一)・(二)について詳しく検討し、その問題点を指摘する。

省略説(一)は既に藤田(2000,2012)によって明確に否定され、また省略説(二)も奥村(1999)によって否定されており、本稿の議論はとりわけ目新しいものには見受けられないかもしれない。しかし、引用構文を扱う諸研究を見る限り、この問題について必ずしもコンセンサスが得られているとは思われない現状があり、基本的な確認作業として、省略という現象の外延を明確にしつつ、省略説(一)・(二)が否定されるものであることを改めて示しておくことにも意義があると考えた。まず省略説(一)・(二)の概要を簡潔に確認することにする。

1. 1 省略説(一)

現代語における引用構文を引用句「～と」とそれを受ける述語句の2つの部分に分けて考えるとき、まず(3)のように、引用句「～と」という部分で表される発言ないし思考という事柄と、「言う」のような発話動詞や「思う」のような思考動詞による述語句で表された発言や思考という事態とが、事実上同じと見なされるものがある。また、(1)のように、引用句「～と」が発言ないし思考を表しているのに対し、述部ではその発言ないし思考とは別の事態を表していると言えるものもある。

(3) a. 佐藤は「遅刻しそうだ」と言った。

b. 佐藤は「遅刻しそうだ」と思った。

(1) 佐藤は「遅刻しそうだ」と家から飛び出した。

藤田(2000)は、現代語の引用構文について次のような種別を立てており、これに従って(3)は第Ⅰ類、(1)は第Ⅱ類ということができる。本稿は、この(4)の分類方法に従って論を進める。

(4) 第Ⅰ類引用構文：述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す

第Ⅱ類引用構文：述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す

省略説(一)は、第Ⅱ類とされているものを、単に第Ⅰ類から「言って」「思って」が省略されたものであるとする考え方である¹。これに従うと、(1)は(5)の波線部を省略したものということになる。省略説(一)は、第Ⅰ類において一定の条件下で「言って」や「思って」が省略されうるという説明方法であるから、第Ⅰ類・第Ⅱ類という(4)のような分類方法を否定することになるだろう。

(5) 佐藤は「遅刻しそうだ」と イッテ／オモッテ 家から飛び出した。

¹ こうした見方は鎌田(2000)などにも見られるが、本稿では、省略説(一)の有効性を正面から論じた大島(2013)を取り上げる。

1. 2 省略説(二)

省略説(二)は、中古語のトテについて省略説(一)と類似した分析を行うものである。すなわち、トテは「と言ひて」「と思ひて」という語句が、「言ひ」「思ひ」という引用述語連用形の部分を省略されることで成り立っている、という分析方法である。これに従うと、(2)は(6)のような文から波線部を省略したものであるということになる。

(2) 女これかれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきところに下りて行く。

(土佐・一月十三日・29)

(6) 女これかれ、沐浴などせむ と イヒ／オモヒ て、あたりのよろしきところに下りて行く。

2. 「省略」の定義と省略説(一)・(二)

先行研究では、“引用述語が任意に出たり出なかつたりするように見える”ということについて、「省略」の他にも、「無形化」「潜在化」「隠蔽」といった用語が持ち出され、臨時的にラベリングされてきたように思われる。それらの用語は、明確に異なる概念と意識されて使われているわけではなく、場合によっては同じ研究の中でパラフレーズされていることもある²。本節では省略説(一)を支持する先行研究として大島(2013)を取り上げ、その「省略」という用語の取り扱いを見たのち、「省略」の定義を改めて考案し、それに従って省略説(一)・(二)の妥当性を問う。

2. 1 大島(2013)における「省略」という用語の取り扱い

藤田(2000,2012)は、文法的観点から省略説(一)を明確に否定しているが、大島(2013)³はそれに答える形で、大島(2010)と同様の角度から再度、省略説(一)は否定できないとする立場を取っている。

(7)～(9)は、大島(2013)で挙げられる例文を簡略に示したものである。大島(2013)は「引用述語に関しては、例外的に、様々な条件下で省略が起こる」とするが、その様々な条件下で起こる「省略」とは、(7)のような文末における述語の省略、(8)のツテの

² 「無形化」「潜在化」は、金(2013)による「潜在」の定義においてパラフレーズされており、「省略」「潜在化」「隠蔽」は、森脇(1995b:72)で「動詞の省略とは《動作性の潜在化(隠蔽)》を意味している」のようにパラフレーズされている。こうした論法は循環に陥るものであり、十分なものとは思われない。

³ 以下、大島デヴィット義和氏の論文は何度も触れるので「大島(2010)」「大島(2013)」と略表記するが、藤田(2000)に対する大島資生氏の書評は「大島資生(2002)」と表記する。

後に「言う」が挿入できること、(9)のように「ってい」という音列を補えるものが含まれており、性質の全く異なる現象を広く含むものである。こうした見方は大島(2010)でも示されており、それについて藤田(2012)は「異なる性格のものを同じ括りに扱って、あらぬ混乱を招くものと言うべき」と批判している⁴。

- (7) 今から郵便局に行こうかと(思っていました)。
- (8) ドサッて(いう)音。
- (9) 旅行に行く(ってい)ったって、三日間だけです。

(大島2013:116の例文を変形)

簡単に確認しておく、(7)は、引用述語においてのみ見られる例外的現象ではなく、様々な種類の述語において起こる省略である(2.3でも触れる)。(8)は、ツテという出自不詳の形式であり、「いう」の挿入が可能ということまでは言えても、本来的に「いう」が必要であると見る理由は特に無い⁵。(9)のツタツテについては、「ってい」(ツテ+「言う」の語幹)という部分が省略されたものとされるが、これは引用述語である「言う」やそのテ形といった文法的機能を担うものでない点でかなり異質なものと見え、「つつたって」のような形式を介した音縮約による所産との見方が妥当と思われる。

このように、大島(2013)は(7)(8)(9)という異質なものを、「省略」という名称でグループピングした上で、「言う」という動詞には、他にもその「省略」というネーミングで説明できそうな現象があるのではないかと考え、そうした考えのもとで第Ⅱ類の引用句の直後にも、やはり「言う」という動詞特有の事情による、「省略」と呼べるような何らかの現象が起こっていると想定している、と筆者には解釈される。

すなわち、大島(2013)の「省略」は、外延の無い仮の概念として立てられたものとい

4 こうした問題点について、大島(2013:121)は「両論文を読みくらべた読者の判断に委ねる」とし、その指摘に対する直接的な回答を避けている。

5 森脇(1995a)や佐藤(2012)には、ツテがトテを語源とするものであるという記述が見られるが、藤田(2012)でも述べられるように、今のところその語源が実証されたことはない。仮にトテを語源とする場合、4節で見るようにトテの直後には引用述語が現れないのが普通だったのだから、むしろツテの直後に引用述語を想定することの方が難しくなるように思われる。また、ツテの本来的な性質によって(8)のような連体修飾ができるという可能性も否定できない。例えば、(i)(ii)のように、ツテが人称代名詞に付いて(人)を表す名詞に続く用法では、判断の揺れはあると思われるが、「いう」を挿入しない方が好まれるのではないだろうか。

- (i) ジェームス君やめて下さい！君って人は、そんなところ不潔ですよ！どんな菌が繁殖してるかも分からないのに！ (侍bobo「jeeさんブックスコレクション」)
- (ii) まったく、俺って奴は本当に……本当に、どうしようもない。(しろくろ「日常賛歌」)
- (iii) ?君っていう人は、そんなところ不潔ですよ！
- (iv) ?まったく、俺っていう奴は本当に……本当に、どうしようもない。

また、(8)を引用述語の省略と考えようとした場合、「ってい」だけでなく、次のように「ていっ」の部分が消去してみても、「行っちゃって」が得られる。「ていっ」ではなく「ってい」とした理由について、大島(2013)では特に説明は行なわれていない。

- (v) 旅行に行く(ていっ)たって、三日間だけです。

うことができよう。そして、引用述語が消えているように見えたり、挿入できるように見えたりする文であれば、一括りに引用述語の省略と見なす、という基準であるから、何が大島(2013)のいう「省略」に該当するか、ということは議論になりえないことになる。藤田(2000,2012)は「省略」という用語を文法的な問題を指すものとして明確に意識しているのに対し、大島(2010,2012)は「省略」という用語の指す範囲を特に意識していない、という点で、両者には違いがあると見て良いだろう。

明確な議論を行なうためには、省略という用語で捉えられる範囲を明らかにすることが必要になる。次項では、日本語における「省略」を扱った先行研究を参照し、一般にも十分認められるような「省略」の定義を示す。

6 たとえば、大島(2013)で「引用述語は多くの環境下で省略されうる(脱落しうる)」と述べられていることから、「省略」=「脱落」と捉えていて、「省略」の定義を明確には意識していないように見受けられる(通常、「脱落」は母音脱落等の音韻に関する現象を指すか、日本語教育の領域で、非母語話者が作文の際に必要な要素を欠くことを指す用語であると思われる)。また、大島(2013)は次のような「XヲYニ〜」という構文について「保持」を意味する「シテ」は文中で省略されることがある」とした上で、「省略ではないとする見方はありうるが、省略と考えるのも、1つの合理的な見方であろう」と述べているように、ある文に「省略」があるか否かを認定するのは見方次第であるという考え方も窺われる。

- (i) a. 「石焼き芋」の声を聞き、ヒロシは財布を手に(して)部屋を飛び出した。
- b. 赤ん坊を背に(して)30分ほどあたりを散策した。
- c. 誇りを胸に(して)戦いぬいた。 (大島2013:122)

なお、この「XヲYニ〜」という構文については、村木(1983)・寺村(1983)・三宅(2000)・山田(2010)などで既に議論されており、例えば山田(2010)も「XヲYニシテ」の「シテ」が省略されたものだとしている。ただし、この構文は中古語においても(ii)のような例があり、中古語のニシテが(iii)のように変化動詞的な意味のものを中心としていることを考慮すると、シテの省略という分析には再考の余地があるといえる。

- (ii) a. …、ただ、この人の御ゆかりに[=匂宮とのご縁があったせいで]さすらへぬるぞ[=放浪して小野の山中に入ることになってしまったのだ]と思へば、[匂宮が]小島の色[=万葉集出典の和歌]を例[=先例・手本]に契りたまひし[=行く末を約束くださった]を、
 b. うれしきにも、げに今日を限りにこの渚を別ることなどあはれがりて、ロ々しはたれ言ひあへることどもあめり。 (源氏・明石・2-268)
- (iii) むすめの尼君は、上達部の北の方にてありけるが、その人亡くなりたまひて後、むすめただ一人をいみじくかしづきて、よき君達を婿にして思ひあつかひけるを、そのむすめの君の亡くなりければ、心憂し、いみじと思ひ入りて、かたちをも変へ、かかる山里には住みはじめたるなりけり。 (源氏・手習・6-300)

「XヲYニ」という形で一種の従属節を形成できたものとも考えることもでき、「XヲYニシテ」からの派生を考えようとする必然性もないと思われる。おそらく、シテ省略を主張する論者は、Xヲは何らかの動詞の目的格項を標示するものだという前提に立脚しているものと思われるが、竹内(2008)によれば、古代語のヲは他動詞文の目的語以外に、自動詞文の主語・感情形容詞文の対象語・属性形容詞文の主語を標示することもある。格助詞ヲが状態性述語文の主格を表示することがあったとするならば、「XヲYニ」を「主格名詞句 ヲ 非飽和性名詞句 断定の助動詞ナリ連用形」のように分析することも可能ではないだろうか(Yが西山2000でいう非飽和性名詞句に限られることは三宅2000で指摘されている)。

2. 2 省略研究小史ならびに省略の定義

まず、先行研究における「省略」についての認識を確認することから始める。

| | 「省略」の定義に関する認識 |
|---------------------------|--|
| 佐伯藤友(1934) | 特になし。 |
| 山田孝雄(1936) | 内面的には、観念上・内容上の主要部分を残して、文法的・形式的に重要な部分を省くこと。外形的な要件は、その文が外形上、不合理に見えるということ。 |
| 国語学会編(1955) (芳賀綏氏執筆部分) | 本来あるべきものが、その時臨時に欠けていること、すなわち、不完全な形で一時完全なものの代理とすることが、その本義。 |
| 谷脇道彦(1956,1957) | 必要欠くべからざるものが必要でなくなったために起こる。最初から不必要なものは除去されるのが当然で、この場合は省略とはいえないはずである。省略法の究明に当たって最初に当面する問題は、必要にして不必要なものとは如何なるものかということではなければならない。 |
| 湊吉正(1961) | 文法上、省略という現象は存在しない。 |
| 村田年(1969) | 形態上完全な文としては必要であるが、意義上はこれを欠いてもさしつかえない場合に文中の語または語群をはぶくこと。 |
| 尾上圭介(1978) | 伝達内容の一部分を言葉に出しては言わず、聞き手の状況理解にゆだねること。 |
| 川合淳介(1978) | 日本語は、そもそも省略があるかないかを認定することが難しい。 |
| 久野暉(1978) | 省略の根本原則：省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能でなければならない。 |
| 佐藤ちゑ子(1983) | 省略は、表層構造ないしはそれに近い連鎖から余剰の情報を負う要素を削除することによって行なわれるものではなく、省略文の空所は、意味的素材が語彙挿入を受けないために生じるものである。 |
| 奥山和子(1988) | 一度出された情報(＝表現)を、後の文でもう一度繰り返すことを避ける表現手段。 |
| 武田明子(1991) | 必要事項は残すが、分かっていることはできるだけ省力化しようという努力の傾向が、あらゆる言語にあり、日本語においては主題を省略することで実行する。 |
| 杉戸清樹(1993) | 本来あるべき本来行動(本来そうあるべきと判断される行動)ではなく、限定的な選択行動(個別的な当面の場面において相応しいと判断される行動)を選択する過程が、言語行動における省略の典型的な姿。 |
| 中村明(1993) | 表現主体による認識の段階で刻まれる現実が、そのまま言語として定式化する。受容主体が省略と受け止めるような表現でも、すべてが省略操作によって成立しているわけではない。 |

| | |
|---------------|---|
| 牧野成一(1993) | 非言語行動における省略の性質 (1) 省略は無省略の常態を前提とする。 (2) 省略には汎人間的なもの文化的なものがある。 (3) 省略出来ない行動がある。 (4) 省略にはかならず何か理由がついている。 (5) 省略には意識的なものから、無意識的なものまである。 |
| 塚田浩燕(1996) | 話し手の意図することを、聞き手(読み手)が復元可能な部分。 |
| 井波真弓(1998) | 特になし。 |
| 野田尚史(2001) | 日本語に見られる代表的な省略は、文レベルの省略・成分レベルの省略・実質的要素レベルの省略の三種に分かれる。 |
| 山口律子(2003) | 特になし。 |
| 新里勝彦(2003) | 特になし。 |
| 金谷武洋(2012) | 文として不可欠な要素を敢えて言わない選択肢がある場合。 |
| 大島義和(2012) | 特になし。 省略説(一) |
| 森脇茂秀(1995a,b) | 特になし。 省略説(二) |
| 藤田保幸(2012) | より完全な非省略の形を前提に、場面・文脈に支えられて復元できることを拠り所として、あるべき要素が消えた形。文脈等に支えられ、完全な形に対するヴァリエーションとして考えられるもの。 省略説(一)を否定 |
| 奥村悦三(1999) | 時にあるべき語句を欠いた形 省略説(二)を否定 |

表1：諸氏による「省略」の定義に関する認識

表1は、上段で日本語に関して「省略」を論じた主な先行研究を発表順に示し、下段で省略説(一)を支持する大島(2013)、省略説(二)を論じる森脇(1995a,b)、省略説(一)を否定した藤田(2012)、省略説(二)を否定した奥村(1999)における「省略」の取り扱いを一覧にしたものである。これを見て分かるように、約80年ほどの間に、「省略」について論じることを標榜した研究は少なからず出ているといえるが、先行研究を踏まえて新たな議論の積み立てが行なわれる向きはほとんど無かったといえる。つまり、「省略」という用語の指す概念はそもそもコンセンサスが得られていないのであって、そうした状況下では、論者の考える「省略」と評者の考える「省略」との間に齟齬が生まれることは避けられないだろう。

まず、省略と取り違えやすい問題として、国語学会編(1955)で「補充可能論のごときも省略論の対象とはしない」というところの補充可能論について簡単に見ておきたい。結論から言えば、省略説(一)も省略説(二)も、この補充可能論の領域で扱われるべきも

のである。例えば(10a)の文は、表している事柄を変えずに、(10b,c,d)というようにさまざまな要素を補充していくことができるが、それらの補充できる語句は所詮補充可能という以上のものではなく、(10a)において省略されていたものを復元したものであると判定するわけにはいかない。もし、(10a)が(10b,c,d)の省略であると認めるのだとすれば、省略されたと見なされる要素は無限大に広がることになる。

- (10) a. 太郎は遊んでいました。
b. 太郎は何かをして遊んでいました。
c. 太郎は一人か二人以上で遊んでいました。
d. 太郎は家の中か外で遊んでいました。

これまでの先行研究で、最も重視されてきたのは久野(1978)である。管見に入る限りで久野(1978)は日本語の省略を扱った最も詳しい研究であり、佐藤(1983)、奥山(1988)、武田(1991)、牧野(1993)、塚田(1996)、井波(1998)といった研究において踏まられている。久野(1978)の示す「省略の根本原則」、すなわち「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能(recoverable)でなければならない。」は、一見、ある要素を省略するための必要条件を示したものに過ぎないようにも見える。補充可能論との区別を明確に意識するならば、「言語的、或いは非言語的文脈から」⁷という部分を、「文脈による以外の復元方法は存在しない」というように解釈する必要があるだろう。それにより、例えば(10b,c,d)のような補充は文脈に拠らずして可能であるため、「省略の根本原則」に抵触することになる。「省略の根本原則」は注意すべき点を含むものの、重視されてきたのも故なきことではないといえる。この、久野(1978)による「省略の根本原則」を重視した上で、諸研究における「省略」についての言及を踏まえると、日本語における「省略」の定義を次のようなものとするのが、一般において十分に認められる捉え方ということになるだろう。

- (11) 冗長さを避ける目的で、聞き手が文脈から補える範囲内において本来なら必要なはずの要素を言語化しないこと

この定義は、一見、大島(2010,2012)などと同様に、外延をはっきりさせず、さまざまな現象を広く包み込むようなものに見えなくはない。そこで、特に「本来なら必要」という点を詳しく見つつ、いくらか説明を補っておくことにする。

本来的に必要でない要素を扱うことが単なる補充可能論に過ぎないということについては先に見たとおりであるが、何をもって本来なら必要と認めるかは、さまざまな次元で考慮されなければならない。野田(2001)は、文法単位に着眼して省略に<文レベルの省略><成分レベルの省略><実質的要素レベルの省略>という3つのレベルを立てている。この3つのレベルを大枠として順に見ていくことにする。

7 「言語的、或いは非言語的文脈から」とは、平たくいえば「文脈から」ということであろう。

まず<文レベルの省略>には、(12)～(14)のように、文中の成分が文脈上に存在する要素との重複により省略されるものが分類される。(12)の「 ϕ 行った。」はテンス的に過去の事態を表す文であり、本来時制副詞等で過去の時間軸上の位置を示すべきだが、質問者の発話の「昨日」と重複するため省略されている。また、「行く」という動詞は主格と着点格に相当する必須成分を要求するので、本来なら「私は」や「大学に」といった要素が必要だが、やはり質問者の発話で既に出た情報であるため、省略されている。(13)の「自転車で」は手段を表す格成分であり、それを受ける述語句が本来ならば必要になるが、先行発話内における「行った」と重複するため省略されている。(14)も、(12)と同様の事情によって述語の省略を認めなければならないものだが、(12)とはかなり性質の異なったものである。先行研究では、省略の目的が先行文脈において既に出た情報との重複を避けることにあるという記述が多く見られるが、(14)のように、等位従属節末の述語に関しては後続節の述語と重複することを条件として省略されることがある。(14)のような省略は、等位構造縮約(coordination reduction)⁸と呼ばれており、省略説(一)を検討する際に重要なものである。<文レベルの省略>と見なされる省略だけでも、被省略要素の本来の必要性は、テンスや動詞の格支配といった複数の次元で捉えられることがわかる。

<成分レベルの省略>には、文節内の自立語部分が省略されるものが分類される⁹。(15)の「だよね」は、一般に品詞分類では付属語に入れられるものであり、本来ならば前接する自立語が必要な要素であるが、先行発話の内容と重複するため省略されている。

<実質的要素レベルの省略>には、例えば(16)の「赤ワイン」という先行発話を受け、「赤」だけでメトニミー的な意味拡張を起こして同等の意味を持つものが分類される。「赤ワイン」という自立語内部において、「ワイン」という部分を省略したものと言うことができるだろう。<文レベルの省略><成分レベルの省略>とは全く異質の現象であり、文法的な問題というよりは意味論的な問題といえる。

⁸ 木村(2012)の用語に従う。小田(2010)は古代語における次のような等位構造縮約の例を挙げている。この例では、文末の「書く」と重複する用言「書き(て)」が省略されていると考えられよう。小田(2010)は、この例を空所化(gapping)としているが、木村(2012)は、右枝節点繰上げ(right node raising)という分析結果を結論として出している。本稿は生成文法の立場でどのような説明が妥当かを論ずるものではないが、空所化という用語の使用は避けることにする。

(i) 絵は巨勢相覧 ϕ 、手は紀貫之書けり。(源氏・絵合・2・381)

⁹ 野田(2001)は、<成分レベルの省略>に「実質的要素の省略」と「機能的要素の省略」の2種を認めており、それに従うと(15)のように文節内の自立語部分が省略されるものは「実質的要素の省略」に入ることになるが、「機能的要素の省略」については、(11)の定義からすると省略と言えない可能性もあると思われるため、本稿では除外した。すなわち、話し言葉では、(i)のように格助詞ヲ・ニが用いられない場合があるが、こうした文について、本来ならば格助詞が本来的に必要な要素だとは言いつてもいい。また、格助詞を補充するにしても、それは前後文脈を参照しなくても可能である。(11)の定義からすれば、こうした付属語の任意的な出現状況は、省略という問題として扱うよりも、補充可能論の領域で扱われるべきものと考えられる。

(i) おい、これ ϕ そこ ϕ 置け。

<文レベルの省略>

(12) お前、昨日大学に行ったか?。—— ϕ 行った。

(13) 居酒屋へはどうやって行った?——自転車 ϕ 。

(14) タマはカツオを ϕ 、ポチは牛肉を食べた。 <等位構造縮約>

<成分レベルの省略>

(15) 鈴木って、馬鹿だよ。—— ϕ だよ。

<実質的要素レベルの省略>

(16) 赤ワインはどこのが良いかな——赤 ϕ はチリが絶品だよ。

文などにおいてある要素が省略されていると認めるためには、その要素が本来なら必要であることを示す必要があるが、そのことを示すに当たっては、以上のようにさまざまな次元がありうる。無論のことであるが、以上が省略の全てであるとは言いきれず、(11)のような定義に従って、省略と考えられる現象が詳しく研究されていく必要がある。

また、(11)の定義でいう省略は共時的な現象であるということにも注意しておきたい。例えば、ある語がその語源よりも短い形式に変化しているとしても、それはその語源を省略したものであるということにはならない。聞き手が文脈から補えるということが、省略を可能にする要件なのであり、語源はその場の文脈から補われる形式ではない。

なお、(11)の定義において、余剰部分を削るという発想もありうることを「言語化しない」としたことに理由がある。次の会話では、特に文脈を与えない限り、Bは「太郎は」という部分を述べない言い方をするのが普通である。ここでもしBが「太郎は来てますよ」と述べた場合、係助詞ハが対比の意味を帯び、例えば「花子は来ていませんが」というような含意を持つことになる。つまり、(17)はそもそも「太郎は」の生起が文脈的に許されていないと見ることができる¹⁰。こうしたことを考慮に入れて、省略とは、もともとある文からある部分を省くのではなく、文脈に置かれたことで初めからその文において本来必要とされる要素が言語化できていない現象を指すものとした。

(17) A: 太郎は来てますか?

B: {#太郎は/ ϕ }来てますよ。

2. 3 省略説(一)と省略説(二)の妥当性

さて、本稿で問題とする省略説(一)・(二)を2.2で見た野田(2001)の分類に入れるとすると、省略説(一)は「言って」「思って」などの文節相当の要素の省略を主張するものであるから<文レベルの省略>という枠組みにおいて、また省略説(二)は「言ひ」「思

¹⁰ こうした観点から、省略に義務的なものと任意的なものとの別を認める分類方法もありうる。義務的な省略については、佐藤(1983)による「自由語彙化仮説」に詳しい。なお2.3で扱う等位構造縮約は、牧野(1983)でも報告があるように、任意性の高い省略といえる。

ひ」のように接続助詞テの直前にある動詞連用形部分の省略を主張するものであるから<成分レベルの省略>という枠組みにおいて、それぞれ検討することになる。

まず省略説(一)であるが、(1)のような第Ⅱ類引用構文において、「言って」「思っ」のような成分が省略されていると見なすことは明らかに(11)という省略の定義に反する。(1)は、引用句「～と」の直後に「言って」「思っ」などを入れることができるが、それは文脈によらずしてできることであり、また「言って」「思っ」を本来的に必要な要素と見る理由も特に無い。(1)は引用句「～と」を受ける要素として「家から飛び出した」という述語句を具備しており、他の述語句の省略を想定する理由は無いのである。

(1) 佐藤は「遅刻しそうだ」と家から飛び出した。

次に省略説(二)についてみても、やはり明らかに(11)の定義に反すると考えるべきだろう。中古語の文を内省判断に基づいて操作することはできないが、仮に次のようなトテに引用述語の連用形を補充して「と言ひて」「と思ひて」とすることができたとしても、それは前後文脈に拠らずしてできることである(前後には特に重複する引用述語も現れていない)。そして、省略説(一)と同様に、トテにおいて引用述語の連用形が必要であるとする根拠も特にない(4節で詳しく考察を行なう)。

(18) 十三日の暁に、いささかに雨降る。しばしありてやみぬ。女これかれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきところに下りて行く。海を見やれば、(和歌) 雲もみな波とぞ見ゆる海女もがないづれか海と問ひて知るべく となむ歌よめる。 (土佐・一月十三日・29)

また、2.2で見た<成分レベルの省略>が(15)のように文頭で起こることと比べてみても、引用句「～と」という成分の直後、すなわち文中で引用述語連用形の省略が起こるとする省略説(二)の考え方は、かなり奇異な現象を想定したものと言えるのではないだろうか。

以上のように、現代語における第Ⅱ類の「～と」及び中古語のトテは、引用述語のテ形や連用形を補える場合が多いことは認められても¹¹⁾、省略という現象として捉えることはできないと結論される。つまり、省略説(一)・(二)は、省略とは明確に区別される補充可能論の領域で扱う問題ということになる。

2. 4 省略と省略説(一)・省略説(二)の外見的比較

2.2及び2.3では、省略という現象の質的な部分の説明を重視したが、実際に省略が起こる環境を表面的に眺めるとどうなるだろうか。省略説(一)・(二)における「省略」は、

¹¹⁾ 3.2.1で検討するように、第Ⅱ類の「～と」の後には「言って」「思っ」を補えない場合もある。

外見的な観点から見て種々の省略現象と区別しにくいものなのだろうか。これまで見てきた省略現象のうち、<文レベルの省略>、等位構造縮約、<成分レベルの省略>、<実質的要素レベルの省略>が起こる環境と、省略説(一)・(二)で「省略」が起こるとされる環境とを比較したのが表2である。

| | 文レベルの省略 (等位構造縮約以外) | 等位構造縮約 | 成分レベルの省略 | 実質的要素レベルの省略 | 省略説(一) | 省略説(二) |
|--------------------|-----------------------|--------|-----------------------|--------------|---------|----------|
| 被省略要素 | 文の成分 (文節相当) | 述語成分 | 文の成分の自立語部分 (実質的要素) | 実質的要素内部の構成要素 | 引用述語のテ形 | 引用述語の連用形 |
| ①被省略要素の直前の要素 | 種々の要素 | 種々の要素 | なし(文頭) | 種々の要素 | 引用句「～と」 | 引用句「～と」 |
| ②被省略要素 | 種々の意味 | 種々の意味 | 種々の意味 | 種々の意味 | 発話か思考 | 発話か思考 |
| ③被省略要素を復元するための前後文脈 | 必要 | 必要 | 必要 | 必要 | 不要 | 不要 |

表2：省略と省略説(一)・省略説(二)における外見的特徴の比較

左側に省略を、右側に省略説(一)と省略説(二)を仮に立てて特徴を比較した。①～③は、省略の発生する環境を便宜的に分類したものである。省略説(一)・(二)では、引用述語のテ形ないし連用形という被省略要素を想定することになるが、そうした想定に立って(19)(20)をみると、①被省略要素の直前の要素は引用句「～と」に限られ、②被省略要素の意味は当然発話・思考に限られ、③被省略要素を復元するための前後文脈は特に必要ない。これに対し、(11)の定義による省略についてみると、一般に①被省略要素の直前には種々の要素が現れ、②被省略要素もさまざまな意味のものがありえ、③被省略要素を復元するための前後文脈も必要である。つまり、省略説(一)・(二)とも、省略の起こる環境とは全く異なる環境に「省略」を想定したものということになる。

(19) <省略説(一)> ひとつの星が生まれては消えていくように、人もみな、この世に生まれ消えていく運命にある。今更ながら「何のために生まれてきたのか」と イッテ／オモッテ、頬づえをつく。どんな人にもそれぞれの人生舞台があり、主役を演じられるのも現在生きているからで、すでにキャスティングされている親兄弟はもちろん、予想だにしない出演者はよほど深い縁があって自分の舞台上に登場するのではないだろうか。

(琉球新報・2009年6月1日、波線部は筆者による挿入)

(20) <省略説(二)> 大殿[=左大臣]は、人々に、際々、ほどおきつつ[=身分ごとに差をつけて]、はかなきもて遊び物ども、またまことにかの御形見なる

べき物など、わざとならぬさまに[=大げさにならないよう]取りなしつつ、
みな配らせたまひけり。君[=源氏]は、かくてのみもいかでかはつくづくと
過ぐしたまはむと イヒ／オモヒ て、院へ参りたまふ。御車さし出でて、
御前など参り集まるほど、をり知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ
風あわたたしう吹きはらひたるに、御前にさぶらふ人々ものいと心細くて、
すこし隙ありつる[=しばらく濡れていなかった]袖ども湿ひわたりぬ。

(源氏・葵・2-61、波線部は筆者による挿入)

省略説(一)は、おそらく、“引用句「～と」は必ず引用述語と共起する”という前提
に立ったもので¹²、省略説(二)は、“中古語における助詞テは必ず用言連用形に接続す
る”という前提に立った説だと思われるが、そうした前提が立つことの根拠が示された
ことは無い。また3節以降の検討によって、そのような根拠を示すことができないこと
も明らかになる。

2. 5 藤田(2000)の所論と等位構造縮約

本稿で認めた省略の定義によるかぎり省略説(一)・(二)が否定されることは明確なも
のといえるが、ここで、藤田(2000)がどのような根拠をもって省略説(一)を否定してい
るかを確認することにしたい。

① 述部は日本語の文構造の要めであり、述語句省略などということは相当の
条件(例えば、同一述語句が反復された場合など)が整わないと難しいはずで
あるのに[筆者注：この位置に注8]、こうした第Ⅱ類構文は生産性が高く、極
めて自由・多様に作られる。(藤田2000:76、下線筆者)

注8を次に引用する。

次のとおり、通常述語句省略のようなことは、一般には極めて難しい。

(イ) a 善行が愛媛ミカンを食って、無駄話をする。

(イ) b *善行が愛媛ミカンを、無駄話をする。

そうしたことが起こるなら、同一述語の反復の際に前者を省略するといった

¹² 古代語では、次のように、引用句「～と」に断定の助動詞が直接付く例も見られる。現代共通語では使われない用法だが、引用句「～と」が必ず引用述語と共起するという前提は誤ったものと見るべきだろう。

(i) 金の体は清浄なりとにコソアレ、[イ金の体ヲ清浄ニアラシメムトニコソアレ、]金無(く)したりと謂(はず)〔非〕といふが譬如ク、濁水を澄滓マシ清浄(ス)ニアラシメツルトキには、復滓穢無くなりヌ。(西大寺本金光明最勝王経古点・卷二・29)

(ii) 夜ざりは、やがて二条院にとまりたまふべしとて、侍心の人々[=源氏に仕える者たち]も、かしこにて待ちきこえんとなるべし、おのおの立ち出づるに、今日にしも閉ぢむ[=源氏がいらっしやなくなる]まじきことなれど、またなくもの悲し。(源氏・葵・2-61)

場合など、省略部分が復元できるような強力な文脈的条件が存在するはずである。

(ウ) —a 私は美しい山並みを描き、清い河の流れを描こう。

(ウ) —b 私は美しい山並みを、清い河の流れを描こう。

(藤田2000:187、下線筆者)

以上を見て分かるように、従属節末述語句の省略は後続節末述語と重複した場合に限られる、すなわち等位構造縮約に限られるということが述べられている¹³。文末以外において述語が省略されることは、日本語においては非常に稀であるが、等位構造縮約はおそらく従属節末述語の省略といえる唯一の現象である。2.2でもく文レベルの省略>の一種として取り上げたが、3節で省略説(一)を詳しく検討する際にもしばしば言及するので、改めて詳しく見ておくことにする。等位構造縮約は、(21a)において「will buy her」が省略されるというように、英語などで分析が進められてきた現象である。日本語にも、(21a)とは省略される要素の現れ方や語順に違いがあるものの、(21b)のようにほぼ対応する表現が存在する。(21b)では、下線部を受ける述語が本来ならば必要であるが、後続節末述語の「買う」と重複するために省略されたものといえる。

(21) a. Bill will buy her dolls and Mike, [~~will buy her~~] a handkerchief.

(根本2007:142)

b. マイクは彼女にハンカチを[~~買い~~／~~買って~~]、ビルは人形を買うだろう。

等位構造縮約は、文中で後に現れる述語との重複によって起こる文レベルの現象なので、(22)であれば、 ϕ の位置には「食べ(て)」が一義的に復元される語として特定される。この点は、(23)のような文末述語が省略されるタイプとは異なっている。(23)で省略されている述語は、「注文したいです」「下さい」「飲もうかな」「もらおう」など、文脈に即したものであれば何でもよく、具体的な一語に特定されるわけではない。

(22) タマはカツオを ϕ 、ポチは牛肉を食べた。

(23) お飲み物はどういたしますか?—私は冷酒を ϕ 。

藤田(2000)は、省略そのものについて立ち入った説明は行っていないが、等位構造縮約以外には従属節末述語句の省略がありえないという指摘を行ったものと解釈でき、本稿でもその主張は支持される。諸研究における「省略」の取り扱いは一応しておらず、

¹³ この他に、「省略は、通常一義的に復元されるはずであるが、第Ⅱ類構造では、そうした一義的な復元が必ずしもできない(多様な復元が可能となる)」(藤田2000:76)という根拠も示される。ここでいう一義的な復元がどのようなことを指すかについては主語の省略を一例として説明することとどめているが(藤田2000:187)、これは挿入可能な要素なら何でも省略と見なす考え方を批判したものと思われる。これに関連して補足すると、本稿は、主語の省略や等位構造縮約のように、復元される要素が特定の語句に決まるもののみを省略とする立場はとっていない。(23)のように、文脈に即してさまざまな語句が復元可能なものも、省略の外延に含むものとするからである。つまり本稿で定義を与えた省略は、文脈の存在という条件の下で多様な復元が可能な場合も含まれ、また等位構造縮約のように文中における後続節末の述語との重複によって復元される語が一つに特定されるものも含まれる。

必ずしも“一般に省略とはこのような現象を指す”ということが認められていない現状があったため、本稿では一般に認められる省略の定義を確認することから始め、次いで省略説(一)・(二)について確認するという順序を取った。その結果、等位構造縮約を引き合いに出すまでも無く、省略説(一)・(二)が否定されることは確認できるが、等位構造縮約は3節で省略説(一)の問題点を指摘する際に重要な比較材料となるので、少々立ち入って概要を把握した。

本稿で省略に与えた定義に基づく限りにおいて省略説(一)・(二)が成り立たないと結論されるが¹⁴、逆に本稿における省略の定義の方こそ不十分なものであり、省略説(一)・(二)を包含するようなものに拡張・修正するべきだという見方を否定したことにはなっていない。そこで、3節・4節では、いったん省略の定義から離れ、省略説(一)・(二)という仮定に立った場合の問題点を複数指摘することで、背理的に省略説(一)・(二)が否定されるものであることを示していくことにしたい。

3. 省略説(一)について

これまで(11)という省略の定義を重視し、それに基づいて省略説(一)・(二)が否定されることを見てきたが、本節では、省略説(一)の根拠や問題点を詳しく検討していく。

3. 1 省略説(一)の根拠

まず、省略説(一)が提唱されてきた理由について考察する。

14 金(2013)のように、第Ⅱ類引用構文の「～と」の後に、「言って」「思っで」が「潜在」するという見方があるので、触れておくことにする。金(2013)は第Ⅱ類引用構文について、藤田(2000,2012)が省略説(一)を否定してきたことを受け、一般的に言われる「省略」という現象としては説明できないことを認めつつ、それに代わる「潜在」という概念を用意し次のように定義する。

本稿での「潜在」とは、個々の特定の動詞ではなく、発話動詞の上位語である「言う/思うのような発話行為を表す機能のみを担う動詞が無形として存在しているということ

(金2013:58、波線筆者)

「言う/思う」というような発話動詞に限定していることから分かるように、「潜在」はさまざまな語に起こる一般的な現象ではなく、第Ⅱ類引用構文の説明のためだけに用意された概念である(第Ⅱ類のために用意した概念に第Ⅱ類が当てはまるという論自体はトートロジーになっている点に注意したい)。また、「無形」という語を定義の中で用いるが、この用語についての説明は無いので、一般的に「無形」がどう理解されているかによることになるが、例えば上野(1999)で「無形」と「省略」とがほぼ同じ概念として扱われているように、「無形」に対する一般的な理解は「省略」と変わらないものと思われる。つまり金(2013)の「潜在」とは、「前後文脈の力を借りなくとも引用句「～と」の後の発話動詞のテ形のみ起こりうるタイプの」という、非常に特殊な「省略」だということになるだろう。そうした「潜在」という現象があることを示すためには、1つでも引用述語が「潜在」することの十分条件となる現象を指摘する必要があるが、金(2013)は必要条件となる現象を提示するに留めており、そのうち引用句「～と」に対する副助詞・係助詞の後接可能性に関する論述には疑問点がある(3.2.3、注18を参照)。

大島(2013)で指摘されるように、外国語においては、誰かの発話や思考の内容を引用する表現では、通常発話・思考を表す動詞が義務的に現れるようである。例えば、(24a)と(25a)はそれぞれ英語とスペイン語の例であるが、「言って」にほぼ相当する「saying」「diciendo」が無ければ、(24b)(25b)のように不自然になる(少なくとも、下線部はそれより前の部分と統語的な関係が失われてしまう)。それに対し、(24c)(25c)はそれぞれ(24a)(25a)の意味に対応する日本語訳であるが、ここから「言って」を取り除いた(24d)(25d)のような表現は、問題なく許容される。ここで挙げることができる外国語は英語とスペイン語の2種類だけであるが、この2種類との比較においてみる限り、日本語は、引用述語が無くても発言や思考の内容を引用する「～と」を用いることができるという点において特殊といってよい。

- (24) a. She looked straight back at Mrs. Quinton, saying, 'I will start tomorrow.'

(BNC, *The rag nymph*の例文を若干修正)

- b. *She looked straight back at Mrs. Quinton, ☐ 'I will start tomorrow.'
 c. 彼女は「明日ははじめます」と言ってクイントン氏の方を振り向いた。
 d. 彼女は「明日ははじめます」と、クイントン氏の方を振り向いた。
- (25) a. Y vieron un gato negro muy grande; se asustaron y echaron a huir, diciendo: Huir, huir, que nos va a arañar.

(Corpus del Español, *Genio e ingenio del pueblo andaluz*)

- b. *Y vieron un gato negro muy grande; se asustaron y echaron a huir, ☐: Huir, huir, que nos va a arañar.
 c. 巨大な黒猫を見て驚き、「逃げろ、逃げろ、引つかかれるぞ」と言って、逃げ出した。
 d. 巨大な黒猫を見て驚き、「逃げろ、逃げろ、引つかかれるぞ」と、逃げ出した。

日本語教育の立場からすれば、(24d)(25d)のような日本語の文について、「言って」や「思って」のような要素が引用句「～と」の後に挿入できる、とすることで簡単に説明をつけることができ、それで日本語学習者も理解したつもりになれるのだろう。無論、「挿入できる」とは補充可能論であり、省略とは区別しなければならない。

また、大島資生(2002)では次のように述べられている。

素朴な言語直観としては、第Ⅱ類の引用構文でも、第Ⅰ類と同様に「より具体的な実質の表現を結びつける」機能があるように感じられる。

- (4) 彼は「やあ、ようこそ」と扉をあけた。

この文では「やあ、ようこそ」という発話をしつつ「扉をあけ」た、のように読むことができる。つまり、引用句は「扉を開ける」動作に伴う発話に対して

その「実質」を表していると思ふことができるのである（場合によっては実際の発話は伴わず、「扉を開ける」動作があたかも「やあ、ようこそ」と言っているかのような歓迎の気持ちを表していた、のように解釈すべき場合もあるだろう）。したがって、第Ⅱ類は、述語の省略ではないとしても、解釈にあたって発話などの表現行為が意味的に補足される、と考えるべきではないか。逆に第Ⅱ類の引用構文を産出する場合はそのような表現行為が解釈の際に補足されるものとして文が形成されると考えられよう。

（大島資生2001:72-73、下線筆者）

すなわち、「素朴な言語直観」により、「言って」や「思っ」のような表現行為が意味的に補足されるというのである。藤田(2000:76)でも「確かに誰でもすぐに思いつきそうな説明である」とされる。つまり、省略説(一)は、文法的な事実を問題とするのではなく、直観に基づいた説明を重視したものであり、例えば日本語教育上の問題を解決するための実利的な側面から迫ったものだったのではないだろうか¹⁵。

3. 2 省略説(一)の検討

以下では、省略説(一)の問題点を挙げていくことにする。

3. 2. 1 無情物主語の第Ⅱ類引用構文

まず、3.1で大島資生(2002)から引用した部分で、表現行為という意味が「解釈にあたって」補足されるという指摘に注意したい。第Ⅱ類では、次のように、引用句が発言内容か思考内容かがはっきりせず、はっきりしなくても特に問題ない表現がありうる。

(26) 「僕は運が良いから当たるかも」と{言っ／思っ}、宝くじを購入した。

(26)は、詳しい前後文脈を与えない限り、引用句の直後に引用述語を挿入するとして、「言っ」と「思っ」のどちらを入れても良い。このことは、第Ⅱ類の引用句は、発言と思考のどちらであるかまでは意味しておらず、具体的に文が実現した結果、文脈の中でどちらであるかの解釈が生まれうる、ということを示している。つまり、第Ⅱ類引用構文における「～と」についての、発言であるとか思考であるとかいう意味解釈は、

¹⁵ 他に省略説を支持する根拠として大島(2013)が挙げるもの一つに、「説明の経済性」がある。すなわち、省略説に従う立場をとることによって、第Ⅱ類引用構文を「と言っ」「と思っ」というテ形接続形式と同じように分析することができ、第Ⅱ類という概念に対する説明を行う必要が省ける、というようなものである。「説明の経済性」は、文法的な事実が何であれ説明がシンプルなら優れているという考え方かと思われるが、仮にその観点に立つとしても、省略説(一)に立つ場合は 3.2 で検討するさまざまな点について説明を行なう必要が出てくるのではないだろうか。

語用論的に捉えられるものということになるだろう¹⁶。

また、上述の大島資生(2002)の指摘に立ち戻って、「実際の発話は伴わず、「扉を開ける」動作があたかも「やあ、ようこそ」と言っているかのような歓迎の気持ちを表していた」という場合にも第Ⅱ類引用構文がありうるという記述に基づけば、(27)のような表現も許容されることが理解されるだろうが、そうした解釈をとる限り、下線部の引用句「～と」の直後に「言って」を補うことはできないだろう。

(27) 屋敷に近づくと、「やあ、ようこそ!」と勢いよく扉が開いた。

また、(28)(29)は、「言って」「思っ」のような引用述語を挿入すると不自然な表現になる。省略説(一)の根拠は、「言って」「思っ」を補いたくなる、という直観的な判断にあるものと思われることは3.1で述べたとおりであるが、こうした例はどのように捉えたらよいのだろうか。省略は、冗長さを避けることがその目的であり、文脈次第では義務的に起こることもある。その場合には被省略要素を補完すると文は冗長になるか、何らかの含意を持つことになって文脈に適合しなくなるのだが(2.2の例(17)を参照)、(28)(29)では「言う」「思う」といった述語が前後に存在しているわけではないため、「言っ」「思っ」が挿入される場合の不自然さを、そうした冗長さや含意の問題とすることはできない。(28)(29)で「言っ」「思っ」を挿入できないのは、発話・思考といった言語行為を行なうことのできない無情物を主語としていることと関わるのではないだろうか。そして、そうした無情物主語の場合にも第Ⅱ類引用構文の使用が可能であるという事実は、藤田(2000)でいう「話し手投写」というメカニズムを拡張的に考慮に入れることで説明が可能かもしれない。すなわち、(28)では、さまざまな生物が避難する理由を話し手が解釈し、解釈した結果を引用句として差し出しており、(29)では、雪の激しく降る様子を話し手が解釈し、解釈した結果を引用句として差し出している、と見ることができるのではないだろうか。

(28) カエルにカタツムリ、イナゴにカマキリ、ナメクジも——。庄内地方を襲った8月18日の豪雨の際、増水した川に流されまいと{??言っ／??思っ}橋の欄干に続々と避難してくる生き物の姿を酒田市、日本報道写真連盟酒田支部長、梅津勘一さん(54)が撮影した。

(2011年10月21日地方版/山形県p24)

(29) 那智わたるのカチューシャがこれでもかこれでもかと{??言っ／??思っ}降る雪のなかをシベリアへ渡っていくシーンが私の眼前によみがえってくる。

(2011年7月17日東京朝刊p8)

省略説(一)はこうした例も、「言っ」「思っ」の省略と見るのだろうが、その場合、

¹⁶ 第Ⅱ類における引用句に与えられる、発話か思考という解釈が、語用論的な意味であることは、新川(1994)においても指摘がある。

省略される前の本来の形として不自然な文を想定することになってしまう。もし、不自然だから義務的に省略されているという見方を導入するならば、あらゆる適格な文は無限に考える不適格な文の省略により成り立つというような、明らかに常識にそぐわない議論をも許容することになるだろう。

3. 2. 2 格成分と連用修飾成分の共起

まず、次の例で「言って」が省略されていることを確認したい。

- (30) 僕は「さあ飲もう」と ϕ 、太郎は「今日は僕らのおごりだから」と言って、次郎を飲み会に誘った。

(30)において、 ϕ の位置に述語が省略されていると考えなければならない理由は、本来、述語との関係によって文中に現れうるはずの格成分である「僕は」や連用修飾成分である引用句「～と」が生起しているためである。それらを受ける述語として、文末と重複する「言って」(あるいは「言い」)が省略されていると考える以外に無い。これは2節で取り上げた等位構造縮約である。

これに対し第Ⅱ類引用構文では、(31)のようにそうした格成分や連用修飾成分との共起が許容されない。 ϕ の位置に「言って」等の引用述語が省略されているとしたら、(30)のように許容されるのではないだろうか¹⁷。

- (31) a. *主人が「おまちどうさま」と ϕ そばが置かれた。

(大島2012の例文を変形、下線筆者)

- b. ??はつきり「こんにちは」と ϕ 、肩を叩いた。

「言って」の格成分になるはずの要素が、次のように、「～と」の後に現れた場合、より一層はつきりと非文になることが分かる。

- (32) a. 「今日は暑いね」と僕に言って、冷房をかけた。
b. *「今日は暑いね」と僕に、冷房をかけた。

等位構造縮約では、こうした格成分の語順でも問題ない。

- (33) 僕は「今日は暑いよね」と太郎に ϕ 、「冷房かけてもいいかな」と花子に言って、冷房をかけた。

省略説(一)に立つ場合、省略の一種である等位構造縮約と比較して明らかのように、

17 なお大島(2013)では、このように「言って」や「思っ」に対する連用修飾成分や格成分が現れる場合に第Ⅱ類引用構文が許容されないという現象について、「「言ッテ」「思ッテ」を主要部とするテ形従属節から「言ッテ」「思ッテ」を省略できるのは、引用句以外の補部・付加詞がすべて省略されているか、あるいはもとから存在しない場合に限る、という一般化が成立する。」とする。「言って」や「思っ」が省略されているならば、等位構造縮約という省略現象と同様に、そこにかかる連用修飾成分や格成分が現れうるのがまず予想されるが、それができないことについての説明は行なわれていない。

格成分などとの共起が許されない点が問題になる。

3. 2. 3 「～と」に対する副助詞・係助詞の接続

引用句「～と」に対する副助詞・係助詞の接続の仕方に着目した場合にも¹⁸、省略説(一)の問題点が明らかになる。まず(34a)は「言って」という引用述語が現れていることから第Ⅰ類と認められ、(34b)はそうした引用述語が無く、「僕の肩を掴んだ」という発話も思考も表さない述語句にかかってくることから第Ⅱ類と認められる。次に、(34a,b)の引用句「～と」の後に副助詞を付加する操作を加えると、(35a,b)となる。第Ⅰ類の場合は(35a)のように適格なままだが、第Ⅱ類の場合は(35b)のように不適格となる。このような現象はすでに山崎(1993)・藤田(2000)で指摘されており、第Ⅱ類の引用句「～と」には何らかの事情で副助詞・係助詞が後接しないという制約が働いているものと考えられる。

一方、省略説(一)を取る場合、第Ⅱ類における引用句「～と」の直後に「言って」「思って」が省略されていると考えるわけだから、(34a)と(34b)は同じ構造ということになる。それに従うならば、(34a)の引用句「～と」が副助詞の後接を許すのと同様に、(34b)

¹⁸ 金(2013)は、第Ⅱ類の引用句「～と」に係助詞・副助詞(「とりたて詞」とする)が付かない現象について、次のような例文によりながら、「言って」「思って」のようなテ形の発話動詞が「潜在」しているためであると論じる。

(33)a. 太郎はおはようと言った。

b. 太郎はおはよう(だけ/さえ/まで)言った。

(34)a. 太郎はおはよう(だけ/さえ/まで)入ってきた。

b. *太郎はおはよう(だけ/さえ/まで)入ってきた。

(金2013:62)

その論を次に引用する。

とりたての作用域は、当該のとりたて詞を含む最小節中の述語を中心とした範囲で、節境界を越えることは無い。藤田(2000)のように、第Ⅱ類構文が第Ⅰ類構文と同様に単文であるならば、とりたて詞を含む最小節の述語は「入ってきた」になるため、(34b)も(33b)と同様に成立するはずだが、実際はそうではない。

このような現象は、(34b)のとりたて詞が、潜在しているテ形節内の「ト」節についていると考えることで説明される。つまり、(34b)は、「ト」節がかかる述語「言って」が潜在するため、「ト」節に付加したとりたて詞の作用域がそれを越えられず、主節動詞を修飾する解釈が許されないのである。(金2013:62、下線筆者)

ここにおいて、引用句「～と」にとりたて詞が付かない理由の説明には疑問点がある。すなわち、(i)のように「イッテ」のようなテ節が「潜在」しており、引用句「～と」がそのテ節の中の一つの成分となっているのだとすれば、イッテを挿入した場合の(i)が適格な文になっていることから明らかなように、その引用句に対するとりたて詞の付加はむしろ許されるはずである。金(2013)は、「とりたての作用域は…節境界を越えることは無い」という指摘をここでは適用せず、逆にテ節を超えて主節動詞を修飾する解釈を取らなければならない、という前提を立てているようであるが、その前提がどのようにして立つかについての説明は特に行なわれていない。このことは、むしろ、「イッテ」が「潜在」していないことを示すものである。

(i) 太郎はおはよう (だけ/さえ/まで) イッテ 入ってきた。

(波線部は「潜在」するとされる引用述語テ形)

も引用句「～と」は副助詞の後接が許されるはずであるが、(35b)は不適格となるのである。

- (34) a. 太郎は「気にしなくて良い」と言って、僕の肩を掴んだ。(第Ⅰ類)
b. 太郎は「気にしなくて良い」と ϕ 、僕の肩を掴んだ。(第Ⅱ類)
(35) a. 太郎は「気にしなくていい」とだけ言って、僕の肩を掴んだ。
b. *太郎は「気にしなくていい」とだけ ϕ 、僕の肩を掴んだ。

等位構造縮約では、こうした副助詞・係助詞の接続が次のように許容され、文末と重複する「言って」が ϕ の位置に省略されているためと説明できる。

- (36) 太郎は「気にしなくていい」とだけ ϕ 、花子は「また来年がんばって…」とだけ言って、私を慰めてくれた。

省略説(一)に立つ場合、副助詞・係助詞が「～と」に付かないことの事情を説明することはできないだろう。

3. 2. 4 第Ⅰ類引用構文に関する引用述語の省略という分析について

大島(2013)は、他言語との比較によって、(37)のような第Ⅰ類引用構文も、引用句の後に「言って」などが省略されたものとする¹⁹。本稿冒頭で考察の対象として挙げたのは第Ⅱ類引用構文であるから、必ずしも言及する必要は無いかもしれないが、この際確認しておきたい。大島(2013)が(37)のような引用構文において引用述語の省略があると主張する理由は、「約束する」という述語に対し「実行を」という目的語格の名詞句が現れるというような、目的語格項を伴う引用構文が英語などの他言語で見出しにくいことにある。しかし、日本語を除く全ての言語に類似する用法が無いことを確認できたとしても、系統のよくわからない日本語にもそれを当てはめる必要はないだろう。本稿における省略の定義からしても、(37)のような文に「言って」等の引用述語が省略されていることは認められない。

(37) 彼は「そうします」と実行(すること)を約束した。(藤田2000:88)
これに関して、金(2013)が藤田(2012)について言及した次の箇所を見たい。

さらに、藤田(2012)は、下記の例を挙げ、以下の文を「言って/思って」を補って読むのは妥当ではないとし、「バカと」は「怒鳴った」に結びつき、その発言内容を示すと解すべきものであると述べ、「省略」という捉え方に強く反論している。

- (10) a. 三郎は、バカと怒鳴った。

¹⁹ 大島(2013:119)では、次の例文の出典が「(藤田2000:80)」とされているが、藤田(2000:80)にはこのような例文は見当たらないので、(37)の例文を指すつもりのものだったと推測して議論を進める。

(i) 彼は「そうします」と実行を約束した

- b. 三郎は、バカと(言って)怒鳴った。
- (11)a. 恵美子は、どうしようと悩んだ。
- b. 恵美子は、どうしようと(思っ)て悩んだ。
- (12)a. 正浩は、そんなことあるものかと言り返した。
- b. 正浩は、そんなことあるものか(言っ)て言り返した。

しかし、(10b)～(12b)が不自然である理由は、他でもなく、述語動詞の意味が重複するからだと思われる。(金2013:55、下線筆者)

金(2013)は、上記例文(10b)(11b)(12b)を不自然なものとして判定し、その理由として、「述語動詞の意味が重複する」ことを挙げている²⁰。たしかに、(12b)は「言って言り返す」という表現に「言う」という要素が連続していきさか冗長に感じられるが、筆者には(10b)と(11b)は特に問題ないように感じられる。この点は、話者によって判断の揺れるところなのかもしれないが、とにかく、金(2013)が「述語動詞の意味が重複する」ことで文が不自然になると指摘している点を認めるならば、(37)において「言っ」の省略があると大島(2013)の考察と衝突することになる。すなわち、(37)で「言っ」が存在する本来の形を作ると、「約束した」との間に発話という意味が重複することになり、こうした意味の重複がもし少しでも文を不自然にするのであれば、このタイプの構文の本来の形を、意味の重複した不自然な文と想定することになってしまうだろう。

3. 2. 5 述語句に着目して

ここでは、これまでの省略説(一)では取り扱われなかった問題として、既に先行研究で指摘されている事実を改めて挙げることにしたい。

まず、第Ⅱ類では主節に命令表現が出にくい(新川1994)。(38a)は許容されるが、これを(38b)のように操作すると不自然になる。もし(38a)で「言っ」が省略されていて

²⁰ なおこの箇所は、藤田(2012)の論旨を正確には汲み取っていないように思われる。すなわちこの箇所では、藤田(2012)が「言っ」「思っ」を補うと不自然になる例を挙げ引用述語を補うことが妥当でないことを説明した、というような指摘を行っているように見える。もしそうだとすれば、それは藤田(2012)の論旨とは異なる。すなわち、藤田(2012)がこれらの例文で説明しようとしたのは、引用述語を挿入して読める文は引用述語が省略されている、という考え方が、「歯止めのないおかしなならえ方を生み出してそれを排除できないこと」に結びつくということである。金(2013)が藤田(2012)から引用した例文は引用述語を挿入しても適格であり、藤田(2012)は、そのように引用述語の挿入という操作が可能であることを「引用述語の省略」と認めてしまうことが、補充可能論に陥るものであることを指摘したものと捉えられる。次の(i)(ii)のようなものがより分かりやすいだろう。

(i) 彼は根拠の無いことを(言っ)て私に納得させようとした。

(ii) 昔別れた女性を(思っ)て各地で探し歩いた。

(i)(ii)も、「言っ」「思っ」を挿入しても文法的には適格であるが、補って読んで適格なら省略だ、という考えに従えば、これらも当然、「言っ」「思っ」の省略ということになってしまう。

(39)のような構造になっているのだとしたら、(38c)のように問題なく許容されることが予想されるところであるが、その予想に反して(38b)はやや不自然である。

- (38) a. 「うちの親は怒らせると怖いから」と、さっさと帰った。
b. ?「うちの親は怒らせると怖いから」と、さっさと帰りなさい。
c. 「うちの親は怒らせると怖いから」と言って、さっさと帰りなさい。

(39) 「うちの親は怒らせると怖いから」と、イッテ さっさと帰った。

また、阿部(1999)は(40)のように主節述語が無意志動詞の場合には第Ⅱ類が用いられにくいことを指摘している。

- (40) a. ??祖父は「いい人生だった」と、亡くなった。
b. 祖父は「いい人生だった」と言って、亡くなった。

省略説(一)に立つ場合、この2つの現象について、述語句が命令表現あるいは無意志動詞である場合には引用述語を省略できない、というように、省略が不可能な条件として記述することになるが、本稿では省略説(一)を否定する立場から、第Ⅱ類引用構文の引用句「～と」が命令表現や無意志動詞と共起しにくい性質の副詞的成分であると考えことにしたい。省略を可能にする条件に、述語句の表現性が関わるということを挙げた研究は管見に入らないが、副詞的成分が意志動詞や命令表現と呼応するか否かを問題とする観点は馴染み深いものと思われる。これについて詳しくは今後の課題としたい。

4. 省略説(二)について

つづいて、省略説(二)の論拠や問題点を詳しく見ていくことにする²¹。

鶴田(1996,2009)は、竹取物語・平家物語(延慶本)の調査により、トテを受ける述語に思考動詞・発話動詞とは異なる動詞が現れることを指摘している。例えば(41a,b,c)の「御輿を寄せたまふに」「下りて行く」「さしはさめりければ」のように、トテを受ける述部には、発話・思考を表さないものが現れるというのである。このように後続節の内容を観察する限りでは、トテは現代語における第Ⅱ類引用構文の「～と」によく似ている。

- (41) a. 帝、「なかさあらむ。なほ率ておはしまさむ」とて、御輿を寄せたまふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。(竹取・61)
b. 女これかれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきと下りて行く。(土佐・一月十三日・29)
c. 白散を、ある者、夜の間とて、船屋形にさしはさめりければ、風に吹き

²¹ 森脇(1995a)のように、トテが上代において既に潜在しており、延喜式祝詞に見られる1例を積極的に上代語の用例と考える立場もあるが、山田(1913)に従いトテは中古以降の形式と考えることにする。

ならさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。(土佐・元日・20)

第Ⅱ類引用構文の「～と」について省略説(一)があったように、山田(1936)・添田(1970)・吉田(1970)・森脇(1995a,b)・山口(2000)といった先行研究において、トテは「と言ひて」「と思ひて」から「言ひ」「思ひ」の部分が省略されたことにより成り立つという省略説(二)が支持されている²²。省略説(二)に従えば、トテの前接要素は、「思ひ」「言ひ」という省略された引用述語連用形の部分で表される思考・発話の内容を引用したものということになる。確かに、(41a,b,c)については、それぞれ「帝」「女」「ある者」の発話か思考の内容をトテで受けているように見える。しかし、(42)のように、動詞終止形を受ける場合はどうだろうか。

(42) 落窪の君の母の死ぬとて、[地券を]かの子に取らせ置きしを、我も忘れて乞ひ取らざりしほどに、かくうせにたるぞ。(落窪・巻3・228)

(42)で、トテの受ける「死ぬ」を発話・思考の内容と見る場合、中古語の動詞終止形が基本的には現在の状態を表すものと解釈されることに従うと「(私は今)死んでいるところだと言って」というような奇妙な意味になる。こうしたトテは、引用句を導いているのか疑わしいものといえよう²³。

本稿では、省略説(二)について詳細に論じる森脇(1995a,b)を取り上げ、「と言ひて」「と思ひて」の「言ひ」「思ひ」が省略される現象がありうるかどうかを検討し、次いで通時的観点から、「と言ひて」「と思ひて」がトテに変化することがありうるかについても触れる。調査対象とした資料は竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記であり、特に断りなく「調査資料」と言う場合はこの9資料を指すものとする。

4. 1 省略説(二)の論理

まず、森脇(1995a)が省略説(二)を論じる際、次のような問題意識に拠っていることに注意したい。

ところが、「て」は活用語の連用形にしか承接しないのであるから、「とて」は「て」についてみると、例外ということになる。例外であるならば、「とて」

²² 山口(2000)は、「省略」ではなく「消去」という用語で説明するが、本質的に変わるところはないだろう。

²³ 鈴木(2009:240)は、現代語では「～ショウト」のような意志表現を用いるような場合(古代語では～セムトのような形で表現すると想定される)でも、古代語では動詞終止形+ト/トテになることがあると指摘し、それを〈目的・動機の分詞形〉と称している。また小田(2010)は、トテが「…ときに」「…に際して」のような時間節として解釈される場合があるとする。このような動詞終止形に接続する用法は、トテが「と言ひて」や「と思ひて」を起源とするという分析の妥当性に疑問を抱かせるものであるが、本稿では詳しく分析することはせず、さしあたり、省略説(二)を疑う傍証として掲げておくに留める。

成立の特殊性が想起され、当然問題になると思われる。

(森脇1995a:14、下線筆者)

中古語において、活用語の連用形にしか付かないはずのテが、トテのように非活用語であるトに付いていることに對し、妥当な説明が必要だ、という問題意識がうかがわれる。しかし中古語においては、サテ・カクテ(カウテ)・ニテのように非活用語である「さ」「かく」「～に」に對してテが承接する用法がある²⁴。中古語のテは一部の副詞的成分にも付くものだから、トテを例外扱いする必要は特に無いといえよう。

- (43) a. さて、池めいて窪まり、水つけるところあり。(土佐・二月十六日・55)
b. いかでこの髪剃りて、よろづ背き棄てんと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。(源氏・夕霧・4-457)
- (44) a. これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ来ける。かくて漕ぎ行くまにまに、海のほとにとまれる人も遠くなりぬ。(土佐・一月九日・25)
b. …[帝が]にはかにおりみさせたまひぬ[=突然、退位してしまった]。世の人、飽かず盛りの御世を、かくのがれたまふこと[=このように突然退位したこと]と惜しみ嘆けど、春宮もおとなびさせたまひにたれば、…(源氏・若菜下・4-164)
- (45) a. かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてにはかに亡せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何ごともしはず。(土佐・十二月二十七日・18)
b. …守の兄弟、またこと人これかれ、酒なにと持て追ひ来て、磯に下りみて別れがたきことをいふ。(土佐・十二月二十七日・18)

ただ、サテ・カクテ(カウテ)・ニテをも、トテ同様に活用語の省略が起きた例外的形式であるという見方があるかもしれないので、検討しておきたい。森脇(1995a)は、引用句「～と」を受ける述語語彙の偏りに注目することで、トテにおいて省略されている動詞が「言ふ」「思ふ」であると推定している。すなわち、省略説(二)は、引用句「～と」が、直後に発話動詞・思考動詞の生起を容易に予想させる要素であることにより(つまり「～と」が「言ひて」「思ひて」とコロケーションをなしたことで)、「言ひ」「思ひ」という発話動詞・思考動詞の連用形部分が省略できるのだという主張に置き換えられよう。より一般化すると、“中古語において「副詞的成分+活用語連用形+テ」という形の

²⁴ 「などで」は副詞の「など」にテが付いたと見られるものだが、ナドは「なにと」から縮約した形式なので、ナドテは「なにとて」の縮約と見ることもできる。つまり、「などで」を非活用語にテが付いたと主張するのはトテが非活用語にテが付いたと主張することと同趣旨ということになりうるので、考察からは除外する。また、ニテを断定の助動詞ナリの連用形にテが付いたという見方がありうるが、(45a)の「にて」のように場所を表すものは断定あるいはコピュラ的な意味が乏しいものと思われる。仮に「に」を活用語連用形と認めるならば、トテに含まれる「と」も、断定の助動詞タリとの連続性を考慮して活用語連用形と認める考え方もありうるのではないだろうか。

コロケーションは活用語連用形の部分を省略しえた”、というような論理が省略説(二)の背後に存在すると想定できる。

その論理に従って、サテ・カクテ(カウテ)・ニテもトテと同様に活用語の省略と見なすべきもの、つまり「さ+活用語連用形+て」「かく+活用語連用形+て」「に+活用語連用形+て」のような構造を省略したものであると想定するならば²⁵、その連用形の活用語彙には、顕著な偏りがあるはずである。そこで、試みに調査資料中の「～と(引用句)+動詞連用形+て²⁶」「かく+動詞連用形+て」「さ+動詞連用形+て」「～に(格助詞)+動詞連用形+て²⁷」という例を全て抽出し、その動詞述語を全て挙げると次のようになる²⁸。

- (46) ～と(引用句)+動詞連用形+て 集まる(3)/あばむ/あわてまどふ/抱く/いなく/言ふ(88)/言ひあはす(2)/言ひおく(4)/言ひおどす/言ひかく/言ひすさむ/言ひなす/言ひ捨つ/言ひ騒がす/言ひ知らす/言ひ放つ/いましむ/いらふ(2)/歌ふ/うなづく/恨む(5)/うるへ言ふ/驚く/驚き惑ふ/おぼゆ(2)/思ししずむ/(四段)思し立つ/思しつつむ/思しのたまはす/思しのたまふ(2)/思しよる/思す(19)/(下二段)おもむく/思ひなす/思ひなる(2)/思ひまはす(2)/思ひめぐらす/思ひ頼む/思ふ(80)/思ほす/四段思ほし立つ/(下二段)書き添ふ/書きつく(2)/書く(12)/重ぬ/傾く/語らふ/語る/聞く(12)/聞こえ出づ/聞こえ動かす/聞こえかく/聞こえごつ/聞こゆ(14)/口すさぶ(4)/こしらふ/答ふ(3)/ささめく(3)/しのぶ(6)/知る(2)/誦す/責む(2)/尋ぬ/立ちとまる/頼む/つく問ひ聞く

²⁵ 山田(1936)は、トテだけでなく、サテ・カクテ(カウテ)・ニテや形容詞連用形にテが付いた形についても、テが完了の助動詞ツの連用形に由来するという観点から、テの直前に動詞連用形が省略されているとみる。これに対し、奥村(1999)は、テを完了の助動詞ツの連用形と見るにしても、一般に動詞型活用の助動詞連用形が文末に現れないのに対し、テだけが文末に用いられることを指摘し、テが他の助動詞と区別されるべき表現性をもつものとする。つまり、助動詞や助詞の生起の仕方は整然とした体系をなしているはずだという想定はもとより困難なのであり、トテや「さて」「かくて」「にて」などについても、活用語連用形部分の省略と見てテの優勢な用法の中で捉えようとする必要性は無いものといえる。

²⁶ 新編日本古典文学全集の本文で「『』<>《》により会話文・心内文としてマークされているものに付いた例のみを対象とした。

²⁷ 「～に(格助詞)+動詞連用形+て」という用例は調査資料中で2162例と多い。安(2000)・添田(1970)は、ニテの成立に動詞連用形の省略があると考える立場から、「にあたりて」「にありて」「におきて」「にして」「につきて」「によりて」を検討の対象として挙げているので、これらの例数を数えることにし、それに加え「につけて」の例数も出した。

²⁸ 次のように、「～と」「さ」「かく」「～に」とその修飾する動詞述語との間に副詞的成分になった動詞テ形も多少含まれるが、大勢を知る上では特に影響ないと思われる。なおニテは格助詞相当なので、「～に(格助詞)+動詞連用形+て」については、名詞に接続したもののみを対象とし、(ii)のように活用語に付いたものは数えていない。

(i) …御息所の漏り開きたまはむこともいと恥づかしう、またかかることやとかけて知りましたはざらむに、… (源氏・夕霧・4-413)

(ii) 贈物、上達部の禄など、世になきさまに、内にも外にも事しげく営みたまふに添へて、方々に選りととのへて、鉄臼の音耳かしがましきころなり。 (源氏・若紫・3-404)

／嘆く／名のる／のたまはす(12)／のたまふ(67)／ののしる／恥ぢらふ／恥づ／腹立つ(2)／独りごつ(4)／ほほ笑む(4)／申す(6)／待つ／向かふ／むつかる(2)／召し寄す／めづ(2)／持つ／喜ぶ／泣く／泣き沈む／見る(4)／笑ふ(4)／笑む(2)／
(439例)

- (47) かく+動詞連用形+て あばる／いふ／おとなぶ／おはします／かけ離る／さし向かふ／さし当たる／す(2)／しきる／しる(2)／とりもつ／とりわく(3)／のたまはす／ののしる(2)／ゆるす／ゐる／下る／世離る／亡くす／吹き出づ／呼び据う／埋る／居立つ／思ふ／思ひよる／歩く／率る／生きとまる／用う／(下二段)立つ／聞く(2)／行き暮らす／見棄つ／重ぬ／鎖し籠む／隔たる
(42例)

- (48) さ+動詞連用形+て す／し直す／心得／思す／思ふ／申す(2)／聞く／言ふ／言ひかく
(10例)

- (49) ～に(格助詞)+動詞連用形+て あたる(12)／あり(2)／(四段)おく(11)／す(38)／下二段つく(286)／(四段)動詞つく(31)／よる(50)／その他(1732)

(2162例)

2例以上あるものは()内に用例数を記し、10例を超えるものには下線を施した。これを見ると、「～+動詞連用形+て」は、確かに「言ふ」「思ふ」が最も多く、コロケーションをなしていたものと言えなくはない。「さ+動詞連用形+て」も、例数は多くないが、引用述語が多いようである(ただしサテが「さ+引用述語連用形+て」と同じ意味で用いられる語であるとは考えにくい)。それに対し、「かく+動詞連用形+て」は、特にある意味特徴を持つ動詞の例数が多いというような傾向は見られない。このことから、カクテ(カウテ)は省略説(二)の論理による活用語の省略を認めることは難しい。また「～に(格助詞)+動詞連用形+て」については、下二段動詞の「つく」によるニツケテという形を取った例が多く、これは複合辞的なものに変化した形式と見て良いと思われる。もし、単なるコロケーションや、そこから更に固定化が進んで複合辞的化するような変化が省略を引き起こすのだとすれば、ニテは、ニツケテを起源とする考えもあって良いと思われるが、名詞句に付くニツケテは次のように機会や身分を表す用法に固定化しているようであり、ニテの意味とは異なる。すなわちニテも省略説(二)の論理に従わない形式と見て良いだろう。

- (50) a. 何のをりをりにつけても、口惜しう飽かずもあるかな。

(源氏・朝顔・2-491)

- b. [源氏は]いづれ[の女性]をも、ほどほどにつけて、あはれと思したり。

(源氏・初音・3-157)

以上から、少なくとも省略説(二)の背後に存在した、“中古語において「副詞的成分+活用語連用形+て」という形のコロケーションは活用語連用形の部分を省略しえた”と

いう論理は、トテ・サテ・カクテ(カウテ)・ニテという4形式のうち少なくとも2形式については通用せず、省略説(二)を説明するために用意されたアドホックなものということになる。テが活用語連用形以外には付きえないという前提に立つ限り、カクテ(カウテ)・ニテなどにも、ひとつひとつアドホックな説明を用意する必要が出てくるが、カクテ(カウテ)・ニテにおいては、どのような述語がいかなる事情によって省略されたものであるかを説明する手立てはないだろう。とすれば、やはりテは活用語連用形だけでなく、ある種の副詞的成分にも後接できたと考えるべきではないだろうか。その場合、トテを例外扱いする必要も無くなることになる。

4. 2 中古語のテに前接する活用語連用形は省略されない

次に、中古語の「活用語連用形+テ」という形において、活用語連用形の部分だけが省略されるということは無かった点を確認したい。

もし中古語で、何らかの事情によって、テに前接する活用語連用形が省略されるような現象がありえたのだとすれば、「活用語連用形以外の要素+テ」という用例が少なからず出るのは当然である。しかし、調査資料中には次の存疑例を除き一切そうした例が見られないのである(トテ・ニテ・カクテ・サテ・ナドテは調査対象から除く)。(51)は、名詞「外」+格助詞ヨリ+テと分析されるように見えるが、意味が通じず、確例とすることができない²⁹。

- (51) [書道の]妙にかしきことは、外より ゆてこそ [=後世に、の意か]書き出づ
る人々ありけれど、[私が]女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本
多く集へたりし中に、… (源氏・梅枝・3-415)

調査資料中、接続助詞テは実に24021例に上るにも関わらず、「活用語連用形以外の要素+テ」の確実な例が1つもないという分布は、共時的に見てテに前接する活用語連用形の省略が許容されなかったという事実をはっきり示すものである。省略説(二)は、このテの前接述語が省略されないという強い文法的な制約の存在が決定的な反証となる。

4. 3 格成分・連用修飾成分との共起に着目して

森脇(1995a)は省略説(二)を前提として、トテが「と言ひて」と「と思ひて」のいずれの省略であるかを判定する手段について考察している。次の例について、「業平」という N_1 (主体)がまず想定され、和歌を聞く対者である「親王」 N_2 が表出するのである」

29 『源氏物語大成』によれば(51)下線部には「とりて」(陽明家本)「とりよりて」(保坂本・麦生本)という異文があり、本文上の問題がある可能性は高い。

と説く。すなわち、トテは、二格項として現れる対者 N_2 があれば「と言ひて」の省略であり、無ければ「と思ひて」の省略だ、ということになる。

- (52) [業平は]さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやげごともありければえさぶらはで、夕暮にかへるとて、(和歌) 忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは とてなむ泣く泣く来にける [=帰ってきた]。

(伊勢・84段・187)

(52)では N_2 に相当する成分は現れていないが、もし、トテが「と言ひて」の省略であるとするならば、森脇(1995a)の指摘どおり、対者格項である N_2 が現れた実例が一定量出ることが予測される³⁰。また、そうした観点に立つならば、「と言ひて」と「と思ひて」のいずれの省略であるかに関わらず、「言ひ」「思ひ」という引用述語部分に対する主格成分や連用修飾成分が現れた例が存在することも予想される。しかし、 N_2 という形で対者を表示する確例も、「言ひ」「思ひ」に対する主格成分や連用修飾成分が現れた確例も、調査資料中からは見出しがたい。このことは、トテが引用述語の省略により成り立つという仮説が有効でないことを示しているだろう。同様のことは省略説(一)でも述べた(3.2.2を参照)

- (53) a. ?猫に「こつちにおいで」と、皿に魚を盛った。

4. 4 音縮約などの観点

これまで、中古語という共時態を想定し「と言ひて」「と思ひて」が省略を起こしてトテとなるとは考えにくいことを論じてきた。省略の定義上、縮約等の変化は考察の対象から除かれるが、本項では、トテが「と言ひて」「と思ひて」という形から変化して

³⁰ 調査資料中では存疑例として(i)(ii)(iii)の3つを見出すにとどまった。(i)の「姫君を」の「を」について、新編日本古典文学全集の注釈では「動作の対象を示す。「…とて」(と言って)にかかるとして上で、「大臣は姫君に「少し外にお出なされ」とおっしゃって」と二格で解釈している。小田(2010)は、ヲは広く「～に対して」のような意味で用いられることがあるとするが、そうだとすれば、トテではなく「忍びて」や「聞こえたまふ」の方にかかっているという解釈もありうると思われる。また、(ii)は「おとどに」が中納言という人物ではなく中納言の邸宅を指す解釈を取れば場所格として十分理解できる。もし人物だとしても、中村(2002)が古代語に二重二格構文が存することを指摘しているように、「おとどに」「北の方に」の二重二格構文である可能性は排除できない。(iii)は、「露」という女の童に命令を行なうものであり、確例かと思われる。

- (i) 黄昏時のおぼおほしきに、同じ直衣どもなれば、何ともわきまへられぬに、大臣 [=源氏]、姫君を、「すこし、外出でたまへ」とて、忍びて、「少将、侍従など率て参て来たり。…本意なむかなふ心地しける」など、ささめきつつ聞こえたまふ。(源氏・常夏・3・227)
- (ii) [越前守は]中納言殿に来て、おとどに「衛門管がかうかうなむのたまひつる」とて、この包める物を、北の方に奉れば、「あやしう、おぼえな」とて、引きあけて見るに、おのが箱なり。(落窪・巻3・234)
- (iii) …、[あこぎは]「さよさよ」と言ひて、[海藻などを]紙に取り分けて、炭取に入れて、ひき隠して持て行きて、露に、「御粥いとよくして持て来」とて、をかしげなる御台求めありく。(落窪・巻一・53)

成立した通時的所産であるという見方についても触れることにする。

まず森脇(1995a)の記述を引用する。

「と言ふ」形の「発話」という実質の意味が、「とふ」形「ちふ」形を産出するまでに頻用され、「提示」(若しくは指定(認定))という意味に形式化したことによって言語主体の抵抗感が薄れ、「とて」に於いて省略が可能になったと考えるのである。例えば、「として」の背後には「とす」が存在したように「とて」成立の背後には「といふ」が存在した、と考えるのである。

(森脇1995a:17、下線筆者)

ここでは、トテの成立を通時的な問題として考える上で2つの重要な観点が示されていると思われる。すなわち、(イ)「言ひ」という動詞部分の<発言>という実質的な意味が希薄化し「と言ひて」と言う形で一つの文法的な機能を担うようになる現象(文法化)と、(ロ)「と言ひて」「と思ひて」のような形が音縮約を起こしていくという現象との2つである。(イ)(ロ)は、(イ)が起こることで(ロ)が起こりやすくなるというように、連動しつつ進行する現象かもしれないが、音縮約と意味変化は直接的な因果関係のない別の現象なので、個別に考察する必要がある。

まず、実質の意味が希薄化しているかどうかは現代話者の判断では明示的に示しにくいので、(イ)の観点から論じることは容易でない。(ロ)の観点で「と言ひて」の音縮約を考えるならば、[toiφite]>[tote]というような変化があったことになるが、この分析にはかなりの飛躍がある。「と思ひて」についても、[to.omoφite]>[tote]のような変化を想定することになり、やはり音縮約で成立するとは考えにくい。「と言ひて」「と思ひて」がトテに縮約するとしたら、何らかの中間的な段階を示す形態の実例があってもよいはずであるが³¹、そのような例は管見に入らない。なお、「といふ」から「とふ」や「ちふ」のように縮約した例があることや、意味的な形式化が起こりえたことと、「と言ひて」の「言ひ」の部分だけが消えるという分析との間には直接的なつながりが見えない点にも疑問が残る。

また、漢文訓読において用いられる「として」と比較するならば、なぜサ変動詞「し」は省略されず、「言ひ」は省略されるのか、という疑問がある。詳しい検討は行わないが、漢文訓読における「として」はこの形で一つの複合辞であり、頻用され、サ変動詞「す」の実質的な意味もかなり薄れたものであると思われる。にもかかわらず、「し」という連用形はそこから消えることがない³²。この事実はむしろ、複合辞化といった変化の中で実質の意味が失われても、テに前接している構成要素は根強く残るものである

31 此島(1973)は、近世後期に「とって」という形式があり、「と言って」から縮約したと考えられるものとする。

32 築島(1963)では、訓点資料においてトテが用いられないことが示されている。

ことを示しているといえよう³³。

5. まとめ

本稿では、第Ⅱ類引用構文について引用述語が省略されているとする省略説(一)・中古語トテについて引用述語が省略されているとする省略説(二)を検討対象とした。

まず、先行研究によりながら省略を“冗長さを避ける目的で、聞き手が文脈から補える範囲内において本来なら必要なはずの要素を言語化しないこと”を指す概念であると、それに基づき省略説(一)・(二)には従えないことを示した。

次いで、省略説(一)については、「言って」「思って」を挿入できない場合があること、被省略要素と想定される引用述語にかかるはずの成分が文中に生起しないこと、「～と」に副助詞・係助詞が後接しないことなどを問題点として指摘し、省略説(二)については、接続助詞テが活用語連用形以外にも付くこと、接続助詞テに前接する活用語の連用形の省略がありえないこと、「言ひ」「思ひ」にかかるはずの格成分が文中に生起しないことなどを問題点として指摘した。

以上により、現代語の第Ⅱ類引用構文における「～と」や、中古語のトテに関して、引用述語の省略という現象が想定できないことは明らかになったといえる。

参考文献

- 阿部忍(1999)「引用節のタイプ分けに関わる文法現象」『山手国文論攷』20 pp.47-62 (神戸山手女子短期大学)
- 安元實(2000)「指定の表現形式「ニテ」は「ニシテ」の縮約形か—中世の用法を中心として—」『大学

³³ 築島(1963)、森脇(1995a)では、漢文訓読文におけるトシテと、和文におけるトテが同等の表現性を持つものと見なされているようだが、そのことを確かめるには、トシテとトテの意味や文法的機能が同じであることを示す必要がある。(i)のトシテは、「言及ぶ」という要素を受け逆接のドモと同等の表現性を持つようであり、終止形に接続するトテの用法に近いが、(ii)のように「民を」という目的格項を取る例ではサ変動詞「し」の実質の意味が強く残っており、(iii)のように慣用的な構文を作る用法は、トテに見られないものである。

- (i) 孔子(の)曰(く)〔於〕君子に侍るときには、三ツノ窓チ有リ。言及は末ルトキニシ
〔之〕而モ言フコト之を躁(さ)か(し)と謂(ふ)。言及(ふとし)而【及フトシテ〔而〕】
【及ヘトモ】言ハナルことは之を隠と謂(ふ)。…
(高山寺蔵論語中原本卷八嘉元元年点・89-137)
- (ii) 伊尹か曰(さく)、「明カナル哉。言ヘルコト、能ク、道を聴クこと、迺チ、進ムて国に君
とシ、民を子とシテ善を為ル者皆、王官に在(レ)。」
(高山寺蔵史記股本紀卷第三建曆元年点・284-31)
- (iii) 又四仏経行(の)〔之〕迹有(り)、傍ニ精舎有(り)、中ニ観自在菩薩ノ像有(り)、誠ヲ
至(し)テ祈請(せ)ハ、願トシテ遂(は)不(といふこと)無(し)。
(興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝永久四年点・卷四・121-45)

- 院年報』17 pp.205-218 (立正大学大学院文学研究科)
- 井波真弓(1998)「省略についての一考察」『拓殖大学日本語紀要』8 pp.174-189
- 上野田鶴子(1999)「コミュニケーションと日本語」『日本語学』18-7 pp.28-35
- 大島デイヴィッド義和(2010)「日本語引用構文における引用述語の省略現象」『茨城大学留学生センター紀要』8 pp.85-99
- 大島デイヴィッド義和(2013)「引用述語の現れない発話・思考報告文—「省略」か「構文」か—」『茨城大学留学生センター紀要』11 pp.113-128
- 大島資生(2002)「〈書評〉藤田保幸著『国語引用構文の研究』」『国語学』53-3
- 奥村悦三(1999)「ことばのなかの合理性—省略をめぐる—」『奈良女子大学文学部研究年報』42 pp.27-41
- 奥山和子(1988)「省略表現の構造と機能」『東北大学日本語教育研究論集』3 pp.48-56
- 小田勝(2010)『古典文法詳説』おうふう
- 尾上圭介(1973)「省略表現の理解」『言語』2-2 pp.91-97
- 金谷武洋(2012)「幻想としての省略—日仏対照研究と日本語教育—」『日本語・日文学研究』2 pp.73-82 (東京外国語大学国際日本研究センター)
- 鎌田修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房
- 川合淳介(1978)「省略について」『日本語学校論集』5 pp.170-178 (東京外国語大学外国語学部附属日本語学校)
- 金賢娥(2013)「引用構文における発話動詞の潜在—複文としての分析—」『日本語文法』13-1 pp.52-67
- 木村宣美(2012)「日本語の逆行等位構造縮約」『人文社会論叢 人文科学編』27 p.37-57 (弘前大学人文学部)
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店 (1981年第3版に拠った)
- 国語学会編(1955)『国語学辞典』東京堂出版(1972年の訂正21版、芳賀綏氏執筆部分pp.537-538)
- 此島正年(1973)『国語助詞の研究』桜楓社(1988年第三刷によった)
- 佐伯梅友(1934)「省略の或る場合」『国語国文』4-11 pp.31-57(京都帝国大学国文学会)
- 佐藤ちよ子(1983)「日本語の省略と自由語彙化仮説」『言語』12-6 pp.114-123
- 佐藤雄一(2012)「「たとえば」の主題提示用法」『共立国際研究』29 pp.33-51 (共立女子大学国際学部)
- 新里勝彦(2003)「日本語の“省略性”について」『沖縄国際大学外国語研究』6-2 pp.247-267
- 杉戸清樹(1993)「言語行動における省略」『日本語学』12-10 pp.4-10
- 鈴木泰(2009)『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 添田建治郎(1970)「格助詞「にて」の形成と言語における交替現象」『語文研究』29 (九州大学)
- 高橋俊三(1976)「おもろ語「とて」考」『沖縄国際大学文学部紀要(国文学篇)』4-2
- 竹内史郎(2005)「上代語における助詞トによる構文の諸相」『国語学彙史の研究』24 pp.167-184
- 竹内史郎(2008)「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『国語と国文学』85-4 pp.50-63 (東京大学国語国文学会)

- 武田明子(1991)「省略とその周辺—日本語とドイツ語—」『独協大学ドイツ学研究』25 p.135-182
- 田中章夫(1977)「助詞(3)」『岩波講座 日本語7 文法Ⅱ』岩波書店
- 谷脇道彦(1956)「日本語における省略法の研究」『文学論叢』4 pp.50-60 (東洋大学国語国文学会)
- 谷脇道彦(1957)「日本語における省略法の研究(承前)」『文学論叢』6 pp.49-62 (東洋大学国語国文学会)
- 塚田浩恭(1996)「日本語の省略—省略の定義とそのアプローチの仕方—」上田功ほか編『言語探究の領域 小泉保博士古稀記念論文集』大学書林pp.311-320、
- 築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会(1991年第4刷に拠った)
- 鶴田洋子(1996)「引用をうける「と」—「竹取物語」の用例から—」『新潟産業大学人文学部紀要』4 pp.1-12
- 鶴田洋子(1997)「引用を受ける「と」「とて」—「土左日記」の用例から—」『立教大学日本語研究』4 pp.53-57
- 鶴田洋子(2009)「平家物語の引用について」『立教大学日本語研究』16 pp.45-55
- 寺村秀夫(1983)「「付帯状況」表現の成立の条件—「XヲYニ……スル」という文型をめぐる—」『日本語学』2-10 pp.38-46
- 中村暁子(2002)「「～ニ～ニ」構文の存在と用法」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』13-1 pp.83-99
- 中村明(1993)「省略の文体論」『日本語学』12-10 pp.11-17
- 新川以智子(1994)「発話行為表現形式における「ト」の機能—「ト」の辞書記述のための考察—」『日本語・日本文化』20 pp.35-53 (大阪外国語大学留学生日本語教育センター)
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 根本貴行(2007)「動詞句における削除と等位構造縮約に関する一考察と諸問題」『駒沢女子大学研究紀要』14 pp.141-150
- 野田尚史(2001)「うなぎ文という幻想—省略と「だ」の新しい研究を目指して—」『国文学 解釈と教材の研究』46-2 pp.51-57
- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸(2012)「引用述語省略説の残映」『国文学論叢』57 pp.53-69 (龍谷大学国文学会出版部)
- 牧野成一(1983)「省略と反復」中村明編『日本語のレトリック』pp.73-87 筑摩書房
- 牧野成一(1993)「省略の日英比較—その引き込みの表現効果—」『日本語学』12-10 pp.41-49
- 湊吉正(1961)「文法上の「省略」について」『言語学論叢』3 pp.24-28 (東京教育大学)
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三宅知宏(2000)「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』35 pp.89-79
- 村木新次郎(1983)「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp.267-292
- 村田年(1969)「日本語と英語における省略法の相違について」『木更津工業高等専門学校紀要』2 pp.91-110
- 森脇茂秀(1995a)「助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐる(1)」『別府大学紀要』36 pp.14-25

- 森脇茂秀(1995b)「助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって(2)」『山口国文』18 pp.69-82
- 森脇茂秀(1995c)「順接から逆接へ—助辞「とて」逆接専用化への過程—」『別府大学国語国文学』37 pp.26-38
- 山口堯二(2000)『構文史論考』和泉書院
- 山口律子(2003)「日本語の省略現象とコミュニケーションにおける問題」『経営・情報研究』7 pp.83-87 (多摩大学)
- 山崎誠(1993)「引用の助詞「と」の用法を再整理する」『研究報告集14 国立国語研究所研究報告105』 pp.1-30
- 山田昌史(2010)「「AをBに」構文の統語構造—「して」省略のメカニズム—」『Scientific Approaches to Language』9 pp.109-13 (神田外語大学言語科学研究センター)
- 山田孝雄(1913)『奈良朝文法史』宝文館(1954年版に拠った)
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館(1954年版に拠った)
- 吉川泰雄(1973)「「とて」「と言って」などの訛形に就いて」今泉博士古稀記念国語学論叢編集委員会編『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社 pp.504-531
- 吉田金彦(1970)「接続助詞 て(とて)・して・で・つつ・ながら・や(し)〈ても〉」『解釈と鑑賞』35-13 pp.67-77

依拠テキスト(引用に際し一部表記を改めた部分がある。)

- 中古和文——竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大和物語・宇津保物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記：新編日本古典文学全集(宇津保物語以外の9資料を調査するに際し、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を用いた。)
- 漢文訓読文——西大寺本金光明最勝王經古点：春日政治(1985)『春日政治著作集 別巻 西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究 本文篇』勉誠社／高山寺蔵論語中原本卷八嘉元元年点・高山寺蔵史記股本紀卷第三建暦元年点・高山寺典籍文書綜合調査団編(1980)『高山寺古訓点資料第一(高山寺資料叢書第九冊)』東京大学出版会／興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝永久四年点：築島裕(1965-1967)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』東京大学出版会
- 現代語——93年・94年・95年の新聞記事：CD-毎日新聞／2011年・2012年の新聞記事：毎日Newsバック／琉球新報：<http://ryukyushimpo.jp/monthly/>／侍bobo「じーさんブックスコレクション」・しろくろ「日常賛歌」：「小説を読もう!」<http://yomou.syosetu.com/>
- 英語・スペイン語——The rag nymph：British National Corpus(BNC) (<http://www.natcorp.ox.ac.uk/>)
Genio e ingenio del pueblo andaluz：Corpus del Español. (<http://www.corpusdelespanol.org/x.asp>)

(つじもと おうすけ 大学院人文社会系研究科 修士課程2年)